

とってよいものとなるように私としても努力していきたい。

環境政策・計画学科のこの一年

上河原 献二
環境政策・計画学科長

2020年度は、コロナ禍対応に追われた一年であった。

環境政策計画学科では4月に39人の入学者を迎えた。しかし、4月7日に予定されていた入学式は中止となった。授業の開始は、一旦、4月22日に延期され、さらにその後、緊急事態宣言が発出されるなどしたことから、5月11日に再度延期された。その間、学生たちは自宅待機となった。それを受けて、「生きている・できる・ありがとう」と題した新生・在学へへの学科長からのメッセージを、オンラインで公開した (<https://depp-usp.com/archives/5131>)。人影の少なくなった学内では、私の研究室の前の草地でタヌキが昼寝するという珍事も起きた(4月17日)。

その間、学科では、遠隔授業開始に備えて、全ての学生の自宅での情報機器・回線環境の個別確認を行った。そして、いよいよ5月11日から、遠隔授業が始まった。突然のオンライン化によって、私は21世紀版「文明開化」の世界に放り出されたように感じられた。大学情報システム上にオンデマンドの授業資料をアップロードし、毎授業毎に課題提出・回収を繰り返しながら、少人数クラスは、会議ソフトで行うこととなった。学科では、遠隔授業期間中の学生の状況を把握するため、アンケート調査を月に一回行った。学生の方でも、遠隔授業に伴う個別授業ごとの課題提出に追われて大変だったようであった。また通学が無くなったことが大きな要因と思われるが、昼夜逆転してしまったという学生も複数いた。毎日繰り返される通学が学生の体調管理に大きな役割を果たしていることを改めて認識した。

なお、月例の学科会議は、感染防止策を取り、開催場所を従来と比べはるかに広い演習室に移して、基本的に対面で続けることができた。オンライン化の趨勢に合わせて、年度途中から、会議資料はオンラインで提出・保管することに決まり、会議のペーパーレスが実現した。

例年開催されている5月と9月の卒業研究中間発表会は、オンラインで行われた。パソコン等の画面を見ながらの発表・試聴・意見交換には、対面以上の集中力を要するため、4回生・教員を二つのグループに分けて、実施した。それぞれのグループの発表会を録画して、自分の参加しなかったグループの発表を後で見られるようにした。学生たちのオンライン技術の習熟は早く、基本的には円滑に行われた。他方、二つのグループに分けたために、コメントできる教員の数を実質的に減少するとの影響もあった。

オープンキャンパスは、全学でオンライン対応となったが、当学科でも、学科ホームページ上の特設コーナーを8月31日から公開し、学科・学生紹介ビデオの提供、教員・卒業研究紹介を行った。学科・学生紹介のビデオは、学生たちが作成したが、高水準のものとなった。

(<https://depp-usp.com/archives/5299>)。

後期から授業をほぼ対面で行えるようになったので、ほっとした。大都市圏等では、キャンパス閉鎖が一年間続いた大学も多かったことと比べると、幸いであった。ただし、感染予防に注意しなければならず、少人数クラスは、Zoom等遠隔の双方向授業で行う場合が多かったと思う。例年であれば、私は少人数クラスではお茶を入れて、くつろいでもらいながら学生たちと議論していた。しかし本年度は、それができなかったことは残念であった。

コロナ禍の影響は、卒業研究にも及んだ。従来であれば現場を訪れて関係者に面談する機会が多いが、2021年度は、コロナ禍のため、面談を電話インタビュー等に変えざるを得なかった場合も多かった。また、調査対象によっては、コロナ禍の影響を強く受けた業種・現場もあったため、研究計画を一部見直さざるをえない学

生たちもいた。

コロナ禍の困難のなかでも、ほとんどの4回生が卒業研究を完成することができた。2月2日、3日、卒業研究の研究審査会を、例年通り交流センターホール（定員600名）にて、対面で行えたのは幸いであった。ドアを開けて換気を確保しつつの開催であった。その際、希望する者にはリモートでの発表も認めるハイブリッド形式とした。ただし、例年であれば、3回生も傍聴する習わしであったが、感染予防のため、出席者を4回生と教員（計約50名）に絞らざるをえなかった。

3月には、瀧准教授が優秀職員として学長から表彰された。理論・実務ともに精通した流域治水政策の研究者として認められており、水害や国土交通省の「流域治水」への政策転換に関連し、新聞・専門誌・テレビに多数出演し、本学の地に足のついた研究姿勢を広く一般に伝えるとともに、知名度向上に大きく貢献したことが、学部長からの推薦の趣旨であった。

令和3年度は、9月卒業1名を加え、40名が卒業した（<https://depp-usp.com/archives/5582>）。

令和3年度入試（一般選抜）の志願倍率については、前期日程6.3倍、後期日程12.9倍と高めであった。隔年で見られる倍率変動に加えて、コロナ禍で大都市の大学で多かったキャンパス長期閉鎖の影響もあったかもしれない。

環境建築デザイン学科のこの一年

高田 豊文

環境建築デザイン学科長

2019年度末に伊丹清講師が退職され、その後任として鄭新源講師を迎えて、本学科教員定数の14名で2020年度がスタートした。鄭先生は、韓国の嘉泉大学校一般大学院を修了後、韓国の建築設計事務所に勤務され、その後、東京大学大学院博士課程を経て、日建設計総合研究所と千葉大学・東京理科大学で環境工学に関する研究に従事された。オフィスビルや公共施設での光環境や温熱環境の測定と執務者に対する

環境心理のアンケート調査など、より良い室内環境づくりを目標として建築環境工学の幅広い分野で研究を行ってこられ、建築環境工学に関する研究と実践教育両面で優秀な人材として、本学科のスタッフの一員に加わっていただいた。しかし、2019年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、伊丹先生の退職記念祝賀会や鄭先生の歓迎会が開催できなかったのは、非常に残念であった。

2020年度は、新型コロナウイルス感染症に振り回された1年であった。2019年3月末時点で、大学からは、感染防止対策を実施した上で4月8日に通常授業を開始できるよう準備の指示があったが、本学科では、4月17日まで対面授業を行わない方針を検討していた。その後、前期授業開始を4月22日とすることが大学から周知されたが、本学科では、5月11日まで対面授業は行わない方針を決定した（4月22日～5月10日は課題等で対応）。さらに、4月9日には、本学科の学生に対する教員メッセージを学科HPで公開した（学生に向けた学長・副学長メッセージの公開は4月17日）。学科学生の通信環境に関するアンケートも全学に先行して実施したが、このような機動的かつ柔軟な対応は学科教員の発案によるものであり、そのおかげで、本学科では全学に先んじたコロナ対応をとることができた。最終的には、大学全体で前期授業は原則、遠隔授業となった。授業開始当初には学生・教員ともに遠隔授業に戸惑う場面もあったが、早めの準備が奏功し、本学科特有の設計系の演習科目でも大きな混乱もなく遠隔授業に対応することができた。

後期には対面授業に戻ったが、感染再拡大の影響で1月に再度、遠隔授業対応となった。本学科の最大のイベントである卒業研究・卒業制作発表会も、その実施方法について、開催直前まで協議が続けられ、最終的に、対面と遠隔のハイブリッド形式での実施となった。例年とは異なる実施方法のため、いくつかの問題点もあったが、全体としては順調に実施されたと言える。学科として、この種の発表会をハイブリッド形式で実施する上での貴重な経験にも